市史講座第 9 回ミニレポート

12 月 20 日（土）第 9 回の講座が開かれました。

第一部「まぼろしの神国博」（講師：金沢大学人間社会研究域教授　能川泰治先生）

昭和 13 年 4 月 5 日から 5 月 29 日までの 55 日間、松江で開催する計画であった神国大博覧会は日中戦争の勃発で立ち消えとなり、以来＜まぼろしの博覧会＞と云われてきました。そして、この博覧会の計画内容や、まぼろしとなった事に焦点を当てた論調や解説などは今までにも発表されていましたが、能川先生はこの大博覧会開催計画を実施した当時の松江市長石倉俊寛の政治手腕に焦点を当てて話をされました。

この博覧会は松江市発展のための政策上の戦略であり、博覧会で発せられる神国出雲に焦点を当て、松江周辺を観光地としてアピールする大きな目的があったと説明されました。

石倉市長は昭和 4 年（1929）から昭和 20 年（1945）の終戦までの間、4 期 16 年間市長として在任した人物です。そして今でも石倉市長は松江市民の記憶に残る人物です。石倉市長が行った 16 年間の施策は、新大橋（現松江大橋）架設、国道 9 号線・新大橋大橋通りの建設と、周辺道路網の整備、市営公会堂・陸上競技場・野球場・へるん記念館の建設、市営自動車、ガス事業、NHK 松江放送局や測候所の誘致など、近代都市松江の基盤作りに大きな役割を果しました。

それに加えて石倉市長の未来像は、観光地としての松江・出雲がイメージされていたのです。「観光事業＝産業振興政策」を視野に、観光客誘致と地元商工業・サービス産業の活性化をはかり、他地域（当時の植民地も含む）で開催される博覧会に積極的に出品して松江の観光資源を宣伝。県・市の観光協会に助成金を出し『水郷松江と神国出雲』を刊行し、名所旧跡・遊覧コースなどを提案していきました。そして漆器・陶器・和菓子・酒・郷土芸術品などの物産を宣伝し、松江駅前に名産品販売所と松江観光協会案内所を設置したのです。

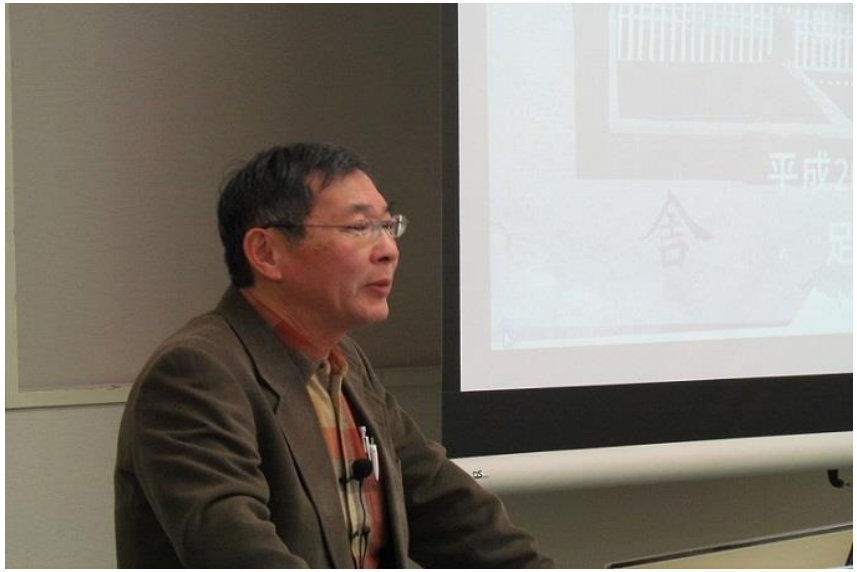
石倉市長が目指したのは、（1）地域の歴史遺産・自然を観光資源として活用し、名産品を生産する地場産業・旅館・交通業など、サービス産業が潤う仕組み作る事（2）遊覧コースの起点・中継点として、観光客をターゲットとする名産品デパート兼インフォメーションセンターとしての松江市の発展でした。これは終戦後の昭和 26 年に、松江が京都・奈良に次いで日本で 3 番目に国際文化観光都市に選定されるその基礎作りが、石倉市政下で着実に進められていたと言えるでしょう。

博覧会はまぼろしに終わったのですが、石倉俊寛市長が目指した松江のあり方は、今日にも大きくつながっていた事なのです。能川先生は松江市にとって、石倉市政を今後もより深く調査することが大切だと結ばれました。

第二部 ：「松江の建造物」（講師：島根県建築士会会長　足立正智　先生）

明治 4 年（1871）の廃藩置県で、それまでの松江藩の治世下から脱して県庁が誕生し、新時代にふさわしい街づくりのため、松江市中にも洋風建造物が建っていったことからお話しを始められました。

明治期になって急速にこのような洋風建築物を建造することができたのも、その背景には松江藩時代があったとのことです。



松江藩では幕末には豊かな財政を基にして、他藩では 5 つの藩でしか購入できなかった軍艦を 2 艘も購入し、軍事強化のためにフランス人教官をお雇い外国人として雇い入れ、入江文郎・山口半六等の秀才を西洋諸国に留学生として派遣し、医学・建築・法学・土木などについて学ばせました。それらの新進気鋭の秀才たちは、その後の日本に大きく影響を与えていきました。新政権になると公的な建造物が多く建造されました（資料 1 参照）。いずれも公的計画による街づくりの中で進行していったのです。添付の表は、松江の明治期の歴史年表と合わせた松江の建物群のリストです（資料 2 参照）。

しかし現存する建物はなく、ほとんどが昭和年代に壊され新ビルに建て替わったのですが、そんな中でも空襲を受けず大地震もなかった松江の町中には、明治の香りがする建物が現存しています。

昨年確認された明治 13 年（1880）建造の初代松江警察署、そして、田野医院として親しまれ、長崎原爆の証言者として小説を書き続けた永井隆博士が誕生した事でも知られる田野家住宅は、明治 6 年（1873）に建てられた私立苧町病院です。これは医院として現存する日本最古の建物です。これらの建造物を保存する運動が松江でも始まりました。

大正期、昭和戦前・戦後間もなく建てられた建造物は、近代建造物群として各地で保存利用の活動が始まっていることを先生は合わせて話され、松江の建造物群への関心を持ってもらうため、田野家住宅の見学会の案内も合わせてされました（資料 3 参照）。